



東京日々新聞

七百四十八號



大坂高麗橋ふ、一萬齋
三井とる呉服舗の
賣場と勤る宗七の平素

中村宗七

温和の者ある、何の故みや
店支配の奥村清水二名も
疎まれ、其容らるる所

又番頭と媚るの
徒へ皆宗七と不快

あはれ此頃小過失
あはれや、兩番頭の計

ひめて苛刻呵責を受へる

役掛とも下ろの風評と聞一向急激な

堪へて店振舞の浪雅と幸ひ一同辭職と宛々密に取出す白刃と
提挈平日も不良手代の後七が抱え足もて込と蹴見が驚き起るを

斬てゆく、尚中進んで奥村が肩先深く研下つ清水は数ヶ所の
傷を負ふ、此物音小家内の人數手みく得物と携へ捕んと奪ひ

中と切抜で本意と達せんと當の敵と尋る間
遂に心神疲ると其不及る事と知り、區の
中へ西へ訴て自ら縛目入りてなり

轉々堂主人録



具足屋

渡辺彫栄

